



「薬の窓口」は過去の資料も含めてホームページで公開しています。参考にしてください。

今回の薬の窓口では、アスピリン喘息について紹介します。

## ➤ アスピリン喘息とは？

- アスピリン喘息とは、**成人気管支喘息の一部の患者さんにおいて起こる**症状で、アスピリンをはじめとする解熱鎮痛薬（代表的な薬剤；アスピリン、ロキソプロフェンなどNSAIDsと分類される薬剤）を服用したときに、**非常に強い喘息症状と鼻症状などを引き起こす（非アレルギー性の）過敏症**のことです。
- アスピリンのみならず、**解熱鎮痛薬全般**で症状を誘発するため、解熱鎮痛薬喘息（またはNSAIDs喘息）とも呼ばれます。

## ➤ アスピリン喘息の特徴

- 成人喘息の約5～10%にみられ、男女比は1：2で女性に多い
- 小児でアスピリン喘息になるケースは稀
- 20～40歳代で発症する方が多い
- アレルギー素因はないことが多い
- 喘息の重症化因子である
- 鼻茸（鼻ポリープ）を伴う慢性好酸球性副鼻腔炎を合併することが多い
- 嗅覚低下（鼻茸のため）

## ➤ アスピリン喘息の症状

- 強い喘息発作
- 強い鼻づまり、鼻汁
- 顔面紅潮や目の充血
- 腹痛や下痢、吐き気などの消化器症状
- 胸痛やかゆみ、蕁麻疹など



## ➤ アスピリン喘息の診断方法

基本は問診と負荷試験（アレルギー学的検査では診断することはできない）問診では以下3点の確認が重要です。

- ①喘息発症後の解熱鎮痛薬の使用歴と副反応
- ②嗅覚障害
- ③鼻茸や副鼻腔炎の既往・手術歴

確定診断は内服負荷試験によるが、増悪誘発試験のため、安定している時期に専門施設の入院下で実施されることが推奨されています。

## アスピリン喘息でも多くの場合で使用できる医療用の解熱鎮痛薬

ただし、喘息症状が不安定なケースでは喘息発作が生じることがある

- PL配合顆粒<sup>®</sup>\*（アセトアミノフェンなど含有）
- アセトアミノフェン（カロナール<sup>®</sup>）**1回300mg以下**  
⇒比較的安全、少量での投与が望ましい
- サリチル酸を主成分とする湿布（NSAIDsを含まないもの（MS冷シップ<sup>®</sup>））
- その他解熱鎮痛薬（エトドラク<sup>\*</sup>、メロキシカム<sup>\*</sup>、セレコキシブ<sup>\*</sup>、チアラミド<sup>\*</sup>）  
⇒特に**セレコキシブは安全性が高い**が、重症不安定な方では稀に増悪し得る



\*：添付文書では、アスピリン喘息において禁忌とされている薬剤。ただし、禁忌とされた薬剤でも医学的根拠に乏しい場合もある（例：セレコキシブ）

## アスピリン喘息の場合でも安全な医療用の解熱薬・鎮痛薬

- モルヒネ、ベンタゾシン
- 内服のステロイド
- 漢方薬（葛根湯など）
- その他、鎮痙薬、局所麻酔薬など

市販薬（一般用医薬品）の解熱鎮痛薬には、アスピリン喘息を誘発する成分を含有するものもあるため、必ず医師や薬剤師に相談してください。

## ➤ 喘息患者さんが注意したいこと

- アスピリン喘息の過敏症状は、解熱鎮痛薬の注射薬、坐薬、内服薬の順に出現が早く重篤で、貼付薬や塗り薬、点眼薬などの外用薬でも症状が起こることがあります（**内服薬（飲み薬）だけではありません**）。
- 解熱鎮痛薬（NSAIDs）の過敏体質は、原則的に一生続くとされています。そのため、喘息の症状がよくなっても、注意が必要です。
- 解熱鎮痛薬以外の薬（抗生物質など）は安全に使用することができます。すべての薬が使用できないというわけではありません。
- 解熱鎮痛薬を使用する際には必ず、医師や薬剤師に相談してください。